

市財政・地域課題など懇談



市政の身近な課題などについて、熱心な懇談が行われました

一関市地域婦人団体協議会連合会（藤野宣子会長）の19年度研修会「市政懇談会」は10月3日、千厩農村労働福祉センターで開催されました。地域社会の課題を学び、行政とのパートナーシップの構築を図ろうと、「身近な生活の『いのちとくらし』」に関わる財政について学びを深めることをテーマとする同懇談会には、同連合会会員らと、市側から浅井市長、佐々木時雄市議会議長、藤堂教育長、関係部長ら、合わせて約150人が出席しました。

開会行事で、藤野会長は「家計を預かる主婦として、市の財政についてもしっかり学びたい。地域の個性を生かしながら、七つの力を結集し、活動してまいりたい」とあいさつ。浅井市長が「地域婦人団体協議会連合会の学習意欲の高さと市民意識の向上を目指す積極的な活動に敬意を表します。今後も市の諸施策推進に一層のご支援ご協力を願いたい」と祝辞を述べました。研修では、初めに市の佐々木総務部長が「一関市の財政を学ぶ」の題で、19年度市予算のあら

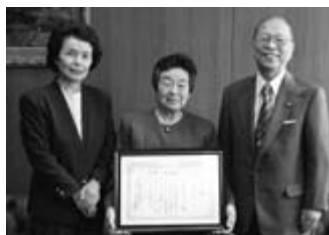
ましや合併による財政効果、今後の財政見通し、市政の課題について講話しました。

続いて行われた懇談は、各地域婦人団体協議会のリーダーとして活躍している皆さんが、▽市の財政状況▽市税▽行政改革▽子育て支援▽環境対策などの話題を提起し、それに対して市側が制度や市の考え方をなどを説明する形で進められました。

このうち、「合併して市民税が大幅に増額し、生活が苦しくなったとの声がかかるが」との話題について、市側から「市民税の増額は国の税制改正の影響であり、全国一律のもので合併とは関係しないもの」とした上で、税制の改正点を説明し、重ねて理解を求めました。

「保育料や給食費などの滞納は、保護者のモラルの低下が占めていると思われるが」との話題については、「本市の場合は、保護者のモラル低下の問題もさることながら、生活困窮によるものが一番多いと認識しており、今後とも相談に応じながら納入の働きかけをしてまいりたい」と説明しました。予定の時間を超える熱心な懇談に、参加者はメモを取るなどしながら真剣に聞き入っていました。

「いきいきシニア」全国表彰 —弥生グループ(弥栄)—



浅井市長に受賞を報告した佐々木代表(中)と佐々木征子副代表(左)

一関地域弥栄地区の「弥生グループ」は、平成19年度農山漁村いきいきシニア活動表彰(社農山漁村女性・生活活動支援協会など主催)で優良賞を受賞し、10月10日、佐々木マツ子代表らが浅井市長に受賞を報告しました。

同グループは13年に地区の女性を中心に結成。地元農産物を使用したみそやがんづきなどの製造・販売を行い、今年8月に農村起業では東北初の合同会社を設立。こうした活発な活動と地域活性化への寄与が高く評価され、今回の受賞となりました。

佐々木代表は「グループのみんなが心を一つに取り組んでいくことが大切。今後も皆さんのご支援やご期待に添えるよう頑張ります」と受賞の喜びを語り、浅井市長の祝福を受けました。

「合唱の祭典」聴衆を魅了

東日本合唱祭

「合唱のまち」一関の秋を彩る第18回東日本合唱祭は10月13日、一関文化センターで催され、合唱ファンを魅了しました。

一関二高音楽部の若々しい女声合唱を皮切りに、招待合唱団の混声合唱団「四季」(東京)、合唱団からたち(福島)、早稲田大学コール・フリューゲル(東京)、浜松ラヴィアンクール(静岡)がクラシックの名曲から懐かしい唱歌まで、バラエティに富む「おはこ」のレパートリーを、全国に知られた美しい歌声でそれぞれ披露し、会場を埋めた聴衆から大きな拍手が送られました。

最終ステージは、地元合唱団が「一関市民歌」で歓迎する中、招待合唱団がステージに入場し、総勢360人による合同合唱が行われました。同合唱祭の顧問を務める吉村信良・全日本合唱連盟名誉会長のユーモアあふれる進行の下、「花」や「赤とんぼ」、「大地讃頌」の大合唱がホールを満たし、フィナーレには、聴衆が加わった「歌声を世界に」の手話コーラスも行われ、ステージと会場が一体となった合唱の輪が大きく広がりました。

「最後の文化祭成功を」 真滝中で合唱交流会

合唱祭前日の12日、浜松ラヴィアンクールの皆さんが真滝中学校(千葉泰校長・生徒86人)を訪れ、同中体育館で合唱交流会を行いました。同団が「夏の思い出」などを美

しい歌声で披露した後、指揮者の岸信介さんが、14日に行われる同中文化祭での全校合唱「大地の歌」を題材に歌唱指導。最初は少し遠慮気味の生徒たちも、岸さんのエネルギーが指導に引き込まれ、演奏が見る見る熱気を帯びていきました。来春「一関東中学校」として統合し、真滝中としては今回が最後の文化祭。その成功を誓う生徒たちの力強い歌声が、体育館いっぱいに響き渡りました。



岸さんの指揮で、全校生徒に浜松ラヴィアンクールが加わった力強い「大地の歌」が体育館を満ちました

戦没者4065人の冥福祈り献花

昨年までの地域別開催を統一した19年度市戦没者追悼式は10月11日、一関文化センターで行われ、各地域から遺族ら約660人が参列し、市内の戦没者4065人の冥福を祈りました。式では、国歌斉唱に続いて、浅井市長が「吾れを極めた戦争で亡くなられた方々のご心情、ご遺族の深い悲しみを拝察いたしますとき、今なお万感胸に迫るものがあります。今日の繁栄が、幾多の尊い犠牲の上に築かれたものであることを忘れることなく、次の世代に語り継がなければなりません。私たちは、先の大戦から学びとった多くの教訓を深く心に刻み、明るく豊かな住みよい社会の実現のため、改め

われ、各地域から遺族ら約660人が参列し、市内の戦没者4065人の冥福を祈りました。式では、国歌斉唱に続いて、浅井市長が「吾れを極めた戦争で亡くなられた方々のご心情、ご遺族の深い悲しみを拝察いたしますとき、今なお万感胸に迫るものがあります。今日の繁栄が、幾多の尊い犠牲の上に築かれたものであることを忘れることなく、次の世代に語り継がなければなりません。私たちは、先の大戦から学びとった多くの教訓を深く心に刻み、明るく豊かな住みよい社会の実現のため、改め

て一層の努力を続けることを誓います」と式辞。戦没者の在りし日をしのんで参列者全員で黙とうを捧げました。「追悼のことは」では、佐々木時雄市議会議長、藤原一二三岩手県遺族連合会会長に続き、遺族代表の松川幸彦、東山町遺族会会長が、第二次大戦で夫を失い3人の子どもを苦労しながら育てた女性の手記を紹介し、「このような不幸は私たちで終わりにしたい。戦争のない、世界の恒久平和を心から願う」と述べました。最後に、市長、来賓、遺族らが次々に献花台に花束を手向け、静かに一礼して戦没者の冥福を祈りました。



「素晴らしい歌の輪を世界の果てまで」。手話を交え、会場全体で「歌声を世界に」が歌い上げられました



献花台に花を手向け、戦没者の冥福を祈って静かに手を合わせる遺族の皆さん